

# 「書く力」を伸ばす英語の指導法

— 効果的な視聴覚教材の活用を通して —

平井早苗<sup>1</sup>

まとまりのある英文が書けるようになることを目的とした英語の指導法の研究を行った。考えや気持ちをまとまりのある英文で表現する活動を通して、書くことに対する興味を生徒に持たせ、書く力の向上を図った。また生徒の関心を高め、学習内容の理解を深めるために視聴覚教材を作成し、それらを効果的に活用した指導法について考察した。

## はじめに

平成18年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査「結果のまとめ」では、「書くこと」の正答率は「聞くこと」「読むこと」と比べて低いと報告されている。

また、平成18年2月中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会審議経過報告(以下「審議経過報告」とする)では、書くことが良好ではなく、特に内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身につけていないため、文レベルではなく文章レベルの訓練が必要ではないかと報告されている。

これらの報告から、英文を書くこと、特にまとまりのある英文を書くことについて、効果的な指導法の追求を考えるようになった。

「書くこと」の指導の一つとして、これまで和文英訳の指導を行ってきた。和文英訳の指導では、語句や文法事項を生徒に定着させることを目的とし、書かれた英文の正確さに焦点を当てる機会が多かった。英文の誤りを修正することに時間を費やし、生徒には誤りのない、正しい英文を書くことに注意を向けさせてきた。このような状況から正確性の重視に偏ることなく、考えや気持ちを英語で表現する機会を増やし、英語で文を書くことに対する意欲を高める必要性を感じるようになった。

そこで、「書くべき内容」に重点を置き、考えや気持ちをまとまりのある英文で表現させる指導法を研究することにした。

## 研究の内容

### 1 「まとまりのある英文」について

この研究では「文レベル」ではなく「文章レベル」のまとまった英文を書くことができることを目的とした。前述した「審議経過報告」では、外国語教育改善の(理解力・表現力等の育成)の中で、「(中略)与えられたテーマについて、短時間で5文程度のまとまり

のある英文を書くことができるなど、具体的な到達水準を設定して、理解力・表現力等の育成を進めていくことが考えられるのではないか。」と提案されている。生徒に英文を書く力をつけるためには、長期的な視野で、生徒の学習状況を配慮しながら、段階的に到達水準を設定し授業を行うことが求められると考えられる。

### 2 まとまりのある英文を書くための手立て

まとまりのある英文を書くために必要と思われる指導を以下のように考えた。

#### (1) トピックの設定条件の明確化

何について英文を書くか(トピック)は、生徒がより意欲的に英文を書くことができるか否かにかかわる重要な要素と考えられる。トピックを設定する際に、次の二つの点に配慮した。

#### ア 自己関連性

自己関連性とは、「ある事柄が、生徒自身のことに関連する程度」という意味である(田中武・田中知 2003)。また、同書では「新しく学んだことを自分自身に関連付けて覚えようとすると、その事柄は深く処理されるという学習効果もあり、習った表現を今後のコミュニケーションにおいて、実践的に使えることに気付かせることとなります。」と述べられている。

自己関連性の高いトピックを設定し、生徒自身の考えや気持ちを表現する過程を通して、生徒の「書くこと」への関心を高めることができると考えられる。

生徒の日常生活を観察し、より自己関連性の高いトピックとは何かを探求していきたい。

#### イ 既習の文法事項

あるトピックについて、既習事項を活用して内容を表現できることを示すことで、「書く内容」が考えやすくなると思われた。そのためには、教科書の文法事項や語彙の配列を考慮し、既習の文法事項の復習を意識的に行うことが大切である。本研究の中では、want to ～, like to ～といった不定詞を用いた表現に着目し、それらの表現を活用することによって、まとまりのある英文を書く活動考えた。

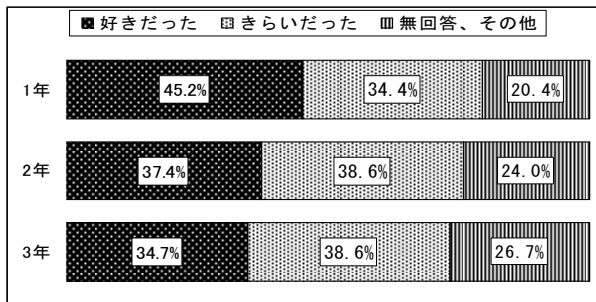
上記のアとイを考慮して、本研究では「将来つきたい仕事について書く」というトピックを設けた。

1 鎌倉市立深沢中学校  
研修分野(外国語(英語))

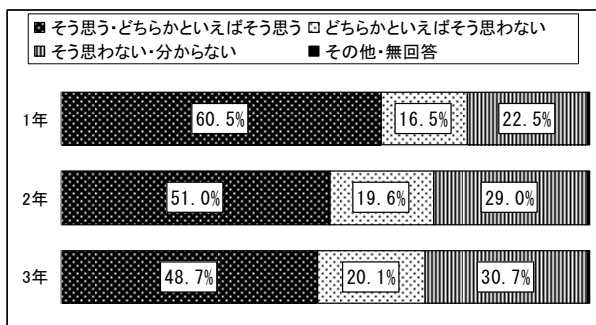
## (2) 視聴覚教材の活用

第1図と第2図は、「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査質問紙調査集計結果」(国立教育政策研究所教育課程研究センター 2005)の中の数値をグラフ化したものである。対象は中学校1年生から中学校3年生である。

1年生では、「自分の言いたいことが英語で書けるようになる学習が好きだった」と答えた生徒は40%以上だった。2年生では、「好きだった」と答えた生徒は8%近く減少し、「きらいだった」と答えた生徒が多くなっている。同様の傾向が第2図にも見られる。



第1図「自分が言いたいことが英語で書けるようになる学習」



第2図「英語の勉強が好きだ」

英語の勉強が「好き」と思う生徒の割合があまり多くはない状況がわかる。このことから、英語に対する興味や関心が高くはないことが伺える。

この状況から、生徒に英語への興味や関心を持たせるために、授業で視聴覚教材を使うことを考えた。視聴覚教材では、絵・写真・文字を提示しながら、音声聞かせることができる。また絵・写真・文字の位置や色を変えることができる。これらの利点を活用して、教材開発が可能ではないかと考えた。

検証授業ではスライド提示用ソフトウェアを活用した教材の作成を試みた。使用した視聴覚機材はコンピュータ、プロジェクター、スクリーン、書画カメラである。

### (3) 「読み手」への意識

現行の中学校学習指導要領(外国語)では、言語活動「書くこと」の指導について「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと。」と書かれている。自分が書いた文章が相手に正しく伝わるた

めに、伝える内容を整理することは大切なことである。ここでは、英文を読む「読み手」が「何を知りたいか」ということを考える機会を設け、まとまりのある英文を作成する指導の手順を考えることにした。

以上(1)～(3)から、次の三つを指導のポイントとして考えた。

#### [指導のポイント1]

まとまりのある英文を書くトピックが、生徒にとって自己関連性が高いこと。また、既習の文法事項を十分活用できるトピックを設定すること。

#### [指導のポイント2]

生徒の興味・関心を高めるために、視聴覚教材を作成すること。

#### [指導のポイント3]

「読み手」は何を知りたいのかを考えながら、内容を考えさせること。

これらの指導のポイントを踏まえ、まとまりのある英文を書くことを目標とした検証授業を、中学校2年生を対象として行った。

## 3 検証授業について

### (1) 検証授業

対象学年	鎌倉市立深沢中学校 第2学年
対象生徒	146名 4学級
使用教科書	NEW CROWN 2 ENGLISH SERIES New Edition (三省堂)
授業実施期間	平成19年10月24日～11月2日
授業時間	各学級 3時間

### (2) トピック設定

検証授業では[指導のポイント1]を踏まえ、「将来つきたい仕事について書く」というトピックを設定した。具体的なトピック設定理由は次の通りである。

- ・将来のことを考える時期であり、生徒の関心が高い題材である。
- ・前の課で学習した内容(不定詞)を活用して表現することができる。

当該生徒は10月下旬に職場体験学習を行っている。検証授業前は職場体験学習を控えていた時で仕事や職種について調べ学習をしていた。この状況から生徒にとって自己関連性の高いトピックであると考えた。

また、前の課で不定詞を学習している。生徒は不定詞を活用することで、このトピックに関連する英文を書くことができると考えた。

今回の検証授業では、まとまりのある英文の条件を次の三つとした。

- ・トピック「将来つきたい仕事について書く」に関連した内容の英文である。
- ・3文以上の英文で構成されている。
- ・want to ～ (want to be ～)を用いた英文が含まれている。

### (3) 検証授業の内容

生徒がまとまりのある英文を書くための指導として、ア～クの指導手順を考えた。

#### (検証授業計画 計3時間)

第1時	ア 授業内容への関心を持つ イ 職業を表す語を理解する
第2時	ウ 基本表現(既習事項)の復習をする エ まとまりのある英文の例を読む オ 基本表現を用いて書く練習を行う カ トピックについて英文を書く①
第3時	キ 書き手から読み手へ立場を変え、作品を読む ク トピックについて英文を書く②

#### ア 授業内容への関心を持つ(第1時)

[指導のポイント2]に即して、職業を表す七つの語を示す視聴覚教材を作成し、以下の手順ですすめた。

①Benesse教育開発研究センター「第1回子ども生活実態基本調査」を参考に、小学生が将来つきたい仕事の一部を表にした。

②小学生がつきたいと思っている仕事は何かを生徒に考えさせた。

③職業を表す絵をスクリーンに映した。

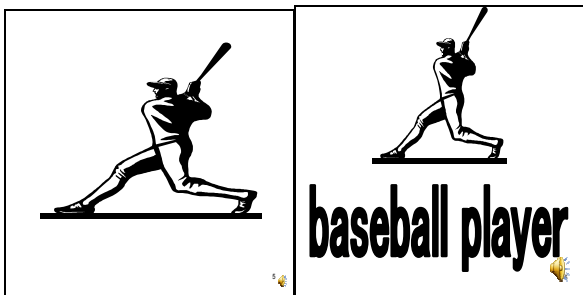
#### イ 職業を表す語を理解する(第1時)

アで示した職業を表す七つの語を提示した。発音・意味・つづりに興味を持たせることを目的とした。提示した語は次の七語である。

(提示した語)

baseball player, soccer player, nurse, scientist, actor, cartoonist, carpenter

これらの語を以下の手順で導入した。第3図、第4図は、実際に検証授業で用いた画面である。



第3図

第4図

① 絵を示して、その絵を表す語の発音を聞かせる。(第3図)

② 絵とつづりを示し、再度発音を聞かせる。(第4図)

第4図は、つづりの色が発音に合わせて変化するように作成されている。色の変化を見せながら発音を聞かせる。

③ 職業を表す語を上記の手順で学習させた後、発音だけを生徒に聞かせ、つづり・意味を書かせ、確認を行った。聞かせる発音の順番は導入時と異なっ

ている。

#### ウ 基本表現(既習事項)の復習をする(第2時)

前の課で学習した文法事項を活用して英文を書くことができるように、次の三つを基本表現とした。

- want to ~
- want to be ~
- like to ~

これらの基本表現について、次の生徒2名の会話を用いてこの会話文を提示し、復習をした。

- (ア) A: Do you like to play baseball?  
B: Yes, I do. I like to play baseball very much.
- (イ) A: Did you start to play baseball when you were a child?  
B: Yes, I did. I started to play baseball when I was six years old.
- (ウ) A: Do you want to be a baseball player in the future?  
B: Of course. I want to be a baseball player like Mr. Matsuzaka.
- (エ) A: Where do you want to play baseball?  
B: I want to play baseball in NY(New York).  
(下線部は、書き取り部分)

上記の会話文をスクリーンに映した後、①～③の手順で基本表現の確認を行った。

- ①ディクテーション…会話の一部を書き取らせる。
- ②音読…会話のせりふ(ア)～(エ)の順番で音読させる。
- ③意味の確認…会話の下線部の表現を中心に日本語で意味の確認を行う。

#### エ まとまりのある英文の例を読む(第2時)

ウの会話のA, Bをそれぞれのせりふに分けた。[指導のポイント2]に即して、スクリーンにそれぞれのせりふを示した。

①生徒Bのせりふをまとめたものが次の英文である。

- I like to play baseball.  
I started to play baseball when I was six years old.  
I want to be a baseball player like Mr. Matsuzaka.  
I want to play baseball in NY(New York).

これらの英文は、トピックに関連している英文である、と生徒に気付かせる。

②生徒Aのせりふをまとめた。

- Do you like to play baseball?  
Did you start to play baseball when you were a child?  
Do you want to be a baseball player in the future?  
Where do you want to play baseball?

この生徒Aのせりふは、トピックに関連した質問である。これらの質問により生徒Bのトピックに関連した英文が引き出されている。

「話す」時にその話を聞く相手がいるように、「書く」時には書かれた文章を読む相手、「読み手」がいることを生徒に認識させる。「読み手」が知りたい内容を考えることが、書く内容を考えることにつながることを生徒に意識させる。

#### オ 基本表現を用いて書く練習を行う（第2時）

「漫画家になりたい」と希望している生徒の立場に立って、英文を書く練習を行う。

この職業の設定理由は、第1時に導入した語の一つであり、多くの生徒にとって英文を書く上で参考になると考えたからである。「まとまりのある英文」として設定した三つの条件を示し、英文を書く練習を行った。このことにより、英文を書くことに慣れ、「書くこと」への抵抗は少なくなったようである。

この後、[指導のポイント3]を踏まえて、読み手が知りたくするような内容を生徒に考えさせ、疑問文を書かせた。

第3時にこの疑問文をまとめ、「疑問文のプリント」として生徒に配付し、「書く内容」を考える手立てとした。

#### カ トピックについて英文を書く①（第2時）

「将来つきたい仕事について書く」というトピックについて生徒に英文を書かせた。授業後にこの課題を提出させた。

#### キ 書き手から読み手へ立場を変え、作品を読む

（第3時）

書画カメラを用いて、生徒の作品を紹介する。この活動のねらいは次の通りである。

- ・示された英文を読ませ、英文を書く際の参考にさせる。
- ・文を書く立場（書き手）から読む立場（読み手）に生徒の立場を変える。

文の読み手として感じたことを、書く立場になった時に活用するよう意識させる。書画カメラで提示した英文は、この検証授業で示した「まとまりのある英文」であることを意識させる。

#### ク トピックについて英文を書く②（第3時）

ここまでの学習内容を参考に再度英文を書かせた。他の生徒の作品を読むことで、自分が書いた英文の表現・内容を推敲する機会とした。また、オの「疑問文のプリント」を生徒に配付し、よりよい英文を書くための参考とさせた。

### 研究のまとめ

#### 1 検証授業の結果と考察

この研究の中で生徒に書かせたい「まとまりのある

英文」として三つの条件を挙げた。この条件についての考察を行った。

#### (1) トピック（「将来つきたい仕事について書く」）に関連した内容の英文である

書かれている英文は、このトピックに関連している内容と判断される文がほとんどだった。全体的に自己関連性があったトピックであったと言える。

また第2時を中心とした次の学習事項が、内容を考えるヒントになったと思われる。

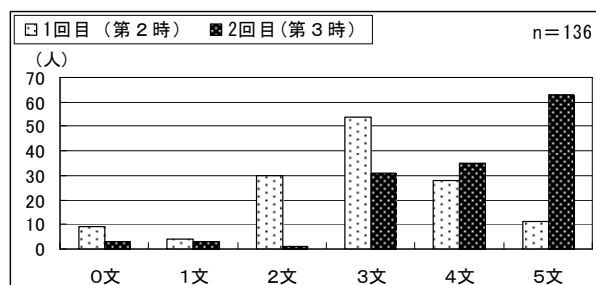
- ・生徒2名の会話表現の学習
- ・漫画家になりたい生徒の立場で英文を書く練習
- ・「疑問文のプリント」の活用

#### (2) 3文以上の英文で構成されている

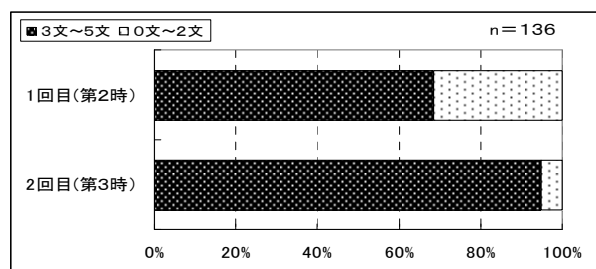
第5図は1回目と2回目の時に書くことができた英文の数と生徒の数を表したものであり、第5図をまとめたものが第6図である。

第6図から、2回目(第3時)に英文を書いた時に3文以上英文を書いた生徒は約95%だった。

この結果から、ほとんどの生徒が3文以上の英文を書くことができたと言える。



第5図 生徒が書いた英文の数①



第6図 生徒が書いた英文の数②

#### (3) want to ~ (want to be ~) を用いた英文が必ず含まれている

3文に満たない英文を書いてきた生徒も含め、ほぼ全員の生徒がこの表現を含めた英文を書くことができた。

具体的に文法事項を示したことは英文を書く上で次のような利点があった。

#### ア 英文が書きやすくなるきっかけになった

第2時にトピックに沿って1回目の英文を書いた時、多くの生徒はこの want to ~ (want to be ~) の表現を用いて英文を書き始めている。具体的に文法事項を

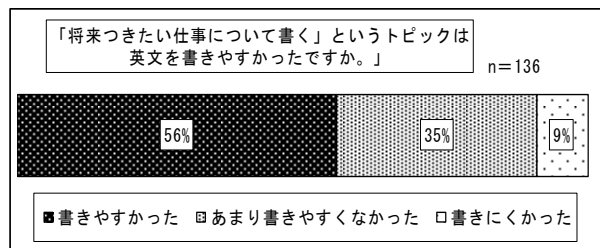
示したことは「書くこと」への手がかりになったようである。「最初の一文を書くことができた。」という自信や安心感が課題に取り組めたきっかけになったと感じられる。

**イ 生徒が表現したい内容を表す英文は一つではない**  
「花屋さんになりたい。」と英語で書く時に「花屋さん( florist )」の単語がわからない場合、「花を売る店＝花の店( flower shop )」と表現を変え、I want to have a flower shop. と英文を書いてきた。生徒は「花屋さん」という一つの表現にこだわらず、「花屋さんになる」→「花を売る店を持つ」と、視点を変えて表現できることを学ぶことができた結果である。

## 2 「指導のポイント」の検証

### (1) トピック設定の条件

学校行事等を考慮し、「将来つきたい仕事について書く」というトピックを設定した。このトピックは英文を書きやすかったか、という質問に関して集計したグラフが第7図である。



第7図 生徒のアンケート結果より

具体的に考えていることや熱中していることがあり、書く内容が容易に思いうかぶ生徒にとっては、このトピックは自己関連性の高いものだった。一方、まだ仕事や職業について具体的に考えがまとまっていない、迷っている生徒にとっては、書く内容を考えることは難しかったという感想もあった。生徒は一緒に学校行事を経験しているが、得る考えや受け止め方は様々である。この点を考慮して指導していくことは、生徒にとって提示したトピックがより自己関連性が高いものになる、と考えられた。

また、生徒にとって自己関連性があまり高くないトピックであったとしても、他の生徒の作品を鑑賞することで、気が付いたことや得ることがあったと感じられるように導くことも「書くこと」の指導に含まれると考えた。

### (2) 視聴覚教材の活用について

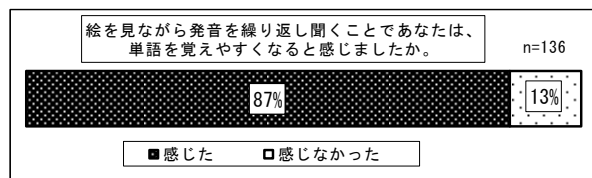
英語の学習に対する生徒の関心や意欲を高め、より深い理解へとつなげることを目的として、視聴覚教材を作成し、授業で活用した。

#### ア 視聴覚教材活用の結果

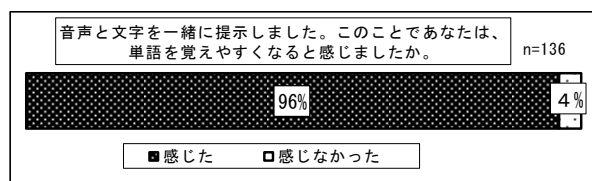
検証授業の第1時で、職業を表す語に対して興味・関心を持たせるために、視聴覚教材を用いて授業をおこなった。検証授業第1時で多くの生徒は緊張している様子だった。検証授業後のアンケートの中にも「最初は緊張

した。」と書いていた生徒もいた。一方、準備されているスクリーンに興味や関心を寄せている様子が、生徒の言動から感じられた。

授業中、スクリーンに映し出される絵や画面が変化し、英語の発音が表示された時に、生徒自らが発音を真似するなど授業に前向きに取り組む姿が見られた。生徒の授業中の様子や感想等により、授業内容に関心を持たせる目的は達成できたと思われた。



第8図 生徒のアンケート結果より



第9図 生徒のアンケート結果より

第8図、第9図から視聴覚教材を活用して提示した語を「理解できた」と感じている生徒が多かったことがわかる。この検証授業の視聴覚教材の活用目的を、英語へ興味や関心を持たせることとし、そのことは理解にもつながると考えた。第1時の授業では多くの生徒が「単語を理解できた」と感じ、実際に単語を書くことができた生徒が多かった。間違いをした生徒も、自ら間違い箇所を正す、正答を書くなど、積極的に取り組んでいた。興味や関心を高めるだけでなく、理解できたと感じられたことで生徒は次の学習へ意欲的に取り組めたと考えられた。

“As a writing teacher, I must build my students’ confidence before I expect competent writing.” (Bratcher, Suzanne 1997) と言われているように、教師が生徒に英文を書かせる時、生徒に「英語を書くことができる。」と自信を持たせることは大事だと感じられた。学習内容に興味を持たせ、生徒が「理解できた」と感じて英文を書くことに臨むことができたことは、意義深いことであった。

#### イ 「視聴覚教材の効果的な活用」とは

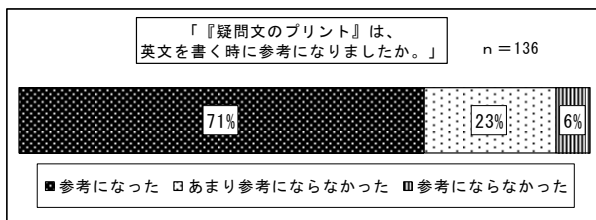
検証授業では主にコンピュータを用いて教材を作成した。この教材を「もう1回聞きたい、見たい。」という生徒の要求や理解の状況により、教員が提示する画面を変える、発音を聞かせる回数を変えるなど臨機応変に活用することができた。このことは生徒の関心や意欲を高めながら、理解を促すことにつながったと感じられた。

視聴覚教材は音や映像により、生徒の関心や興味をひきつけることができる。また英語を聞かせ、聞いた英語を画面に文字で映すこともできる。これらを活用

し英語を聞くこと・読むこと・書くことの複数の技能を連携させ、連続性のある授業展開を構成することも可能だとわかった。視聴覚教材の利点を意識し、教材の選定や作成、使用の時機を考慮し授業の中で活用していくことは、学習事項の理解を促進することになる。このような活用が「視聴覚教材の効果的な活用」であると考えられる。

### (3) 読み手を意識すること

第3時の授業では読み手を意識させるために、第2時に生徒が考えた疑問文をプリントにして生徒に配付した。「文を読む人は、何を知りたいか。」を考えることは、書く内容を考えるヒントになると説明した。



第10図 生徒のアンケート結果より

第10図より、「疑問文のプリント」を参考にしたと答えた生徒は70%以上だった。基本表現を使えば英文を3文書くという目標は達成できる。この目標を達成できたことで「書くこと」に興味を持ち、書く内容を考えるヒントが手元にあることで、英文を書くことができた生徒がいたことが推測できる。生徒のアンケートからは「疑問文プリントで書ける幅が広がった。」「読み手側の気持ちを考えて英文を作ることは、やりやすかった（英文を書きやすかった）」という感想があった。

これからは、疑問文のプリントのような手立てがなくても、生徒の中に読み手を意識できるようになることが今後の課題と思われる。

「『英語が使える日本人』の育成のための英語教員研修ガイドブック」(文部科学省 2003)の中では、「(中略)自分が書こうとするものには読み手がいるという意識 (sense of audience) を生徒に持たせることが何よりも重要である。読み手がいるからこそ、内容を理解し、ことばを選び、相手に誤解されないように書くことが必要になる。」とあり、読み手への意識を生徒に持たせることの重要性について述べられている。読み手の意識を持つことを授業の中で学習していくことで、語句や文法事項を覚え活用していくことにつながり、一方、コミュニケーションの基盤を作り出すことにもつながっていくと思われる。

### 3 今後の課題

「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」(中央教育審議会 2007)には、「『書くこと』に関して、自分の考えや気持ちなどを読み手に正しく伝えられるよう、内容的にまとまりのある一貫した文章を書けるように、指導の充実を図る。」と書かれている。

今後も「書く力」を育成していくことが必要とされ、指導上の課題の一つとなることが予想できる。

本研究では、指導上のポイントを明確にしながらか効果的な授業方法について考察をした。英文を書くときに読み手を意識させることについては、「読み手」から「書き手」に対して、英文を読んだ後の感想等を伝える機会を設ける必要性を感じた。今後の授業の中で、さらに工夫・改善をしたい。

### おわりに

英語の「書く力」を伸ばすために、視聴覚教材の作成や、自己関連性が高く既習事項を用いて表現できるトピックの設定、読み手を意識させる指導について考察した。多くの生徒が主体的に取り組み、設定した条件の英文を書いたことから、この取組はある程度の成果があったと考えられる。

今回得たことを活用・改善していき、生徒の英語を書く力を伸ばすことに反映していきたい。

### 引用文献

- 神奈川県教育委員会 2007 「平成18年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査 結果のまとめ」
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2005 「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」
- 中央教育審議会 2006 「初等中等教育分科会教育課程部会審議経過報告」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401.htm)(2007. 4. 26取得))
- 中央教育審議会 2007 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/001/07110606/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/001/07110606/001.pdf) (2007. 11. 27取得))
- 文部科学省 2003 「『英語が使える日本人』の育成のための英語教員研修ガイドブック」 開隆堂出版 p. 91
- 田中武夫・田中知聡 2003 「『自己表現活動』を取り入れた英語授業」大修館書店 p. 46
- Bratcher, Suzanne 1997 *THE LEARNING-TO-WRITE PROCESS IN ELEMENTARY CLASSROOMS* LAWRENCE ERLBAUM ASSOCIATES, PUBLISHERS Mahwah, New Jersey p. 24

### 参考文献

- Benesse 教育開発研究センター 「第1回子ども生活実態基本調査」(<http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu.data/2005/hon3.2.03htm>(2007. 10. 4取得))